

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

●理事会／理事長からのメッセージ	1
●第19回東京国際ブックフェア／サマーパーティー	2
●KeikoのNY通信・新連載	3
●楽譜のおなはし	4
●アイルランドの石(2)	5

理事会

2012年6月14日(木) 午後4時～ 於ユサコ会議室

出席：山川理事長、宮川副理事長、土方理事、グレッシャム理事、仲理事、鶴理事、松村理事（長谷川委員長、事務局）

1. 2012年度活動方針

- ・各委員会から出された活動内容を確認した。会報、ダイレクトリーの印刷体の是非を検討するため、両委員会の合同会議を開く。
- ・SIGの講演会は6月15日(Ronald Suleski氏・東京)、9月13日(朝倉氏/民博・大阪/関西パーティー時)が

決まっている。

- ・一般会員向けセミナーは総務委文化・教育Gが企画する。

2. 2013年度役員選挙日程確認

定款の改訂により日程が変更されるため、事務局から説明があった。次回の選挙では未経験社の当選・辞退が考えられるので対策が必要。また選挙管理委員長の候補者を決めた。

3. その他

- ・雄松堂書店の仲理事から、次回より両宮氏と理事を交代する旨の報告があった。

理事長からのメッセージ

5月30日から6月1日まで、ワシントンDCで開催されたSSP(Society of Scholarly Publishing) 2012の総会に出席致しました。今回はその総会に出席し感じたことを述べさせていただきます。

SSPは学術分野の著名編集者、出版社や出版流通等の主としてミドルのマネジメントが加入する学会です。将来の学術出版と流通について活発なペーパー発表、セミナー、会議等を通じて意見交換が行われるレベルの高い学会です。

今年の総会には世界中から880名を超える関係者が集い大変な盛会でした。会議のトピックスの中心は何と言ってもSocial NetworkとMobileです。ペーパーの時代からインターネットを通じてデジタルコンテンツの配信が始まった途端、Social NetworkとMobileが登場し、情報が大量生産され、出版者から読者に一方的に流れる流通機構がその根本を揺さぶるという現象が起きています。これに対処するため大手STM出版者や学会はいろいろな試みを通じて生き残りを図っています。

Social Networkを支えるのは若い世代が中心です。インターネットを通じて双方向での情報交換ソフトウェアがベンチャーキャピタルから提供されています。ただ、このネットワークに参入するためには、単なる機器やソフトウェアの操作だけではなく、より高い英語力が求められます。我が

国の若い世代もブログやツイッターを利用していますし、フェースブックの普及は目を見張る思いがします。これらのMobileを用いたSocial Networkにより、情報流通の双方向性が既存の流通体系を蝕んで行くことは間違いありません。

一方気になることは、日本の若い人々が近年国内指向になっていることです。HarvardやStanford Universityに留学する学生は年々減っています。国際化が叫ばれている一方でSocial NetworkやMobileが国内の限られた人達のみでの閉鎖的な利用が進むのではないかと懸念されます。学術研究分野での情報交換の両極化がますます進み、やがては流通に携わる私達にも影響が迫ってくるものと思います。もっとも学術情報の読者が一方的に情報の受け手である限り、現在の情報伝達の媒体が紙であれ、デジタルであれ存続していくことも間違いありませんが、その行方を注意深く見つめて行く必要があると思います。

最後になりましたが、5月18日に開催されたJAIPの定期総会におきまして、全ての議案が滞りなく承認を得ることができました。これに伴い2012年度の事業も逐次執行されておりますことを会員の皆様にお礼方々ご報告申し上げます。(総会の報告は後日の会報に掲載致します。)

日本洋書協会

理事長 山川 隆 司

第19回東京国際ブックフェア

第19回東京国際ブックフェアは、7月5日(木)～8日(日)の4日間、お台場の東京ビッグサイトで開催されました。今年は同時開催展併せて世界25ヶ国から800社が出展する規模となり、世界中からあらゆるジャンルの本が並んでおり、普段はあまり目に触れることのないものから、サウジアラビアや台湾、イタリアなど世界各国の人気書籍も各ブースの軒先に並び、注目を集めていました。

会期中同会場では、同時開催展として「第16回国際電子出版EXPO」、「ライセンシングジャパン」、「クリエイターEXPO東京」が開かれていましたが、会期が7月6日迄で一般客が来場する7/7、7/8の両日はブックフェアの単独開催となりました。「第16回国際電子出版EXPO」では電子書籍端末をはじめ、デジタルコンテンツソリューションに関連する国内外の企業がブースを出展し、多くの人で賑わうなど電子書籍の注目の高さをうかがうことができました。電子書籍といえば、先日アマゾンが通販サイト「Amazon」において、電子書籍端末「Kindle」を日本国内で発売することが発表されたばかりですが、そこに楽天から新端末「Kobo Touch」がリリースされるとのニュースもあり、今後電子書籍市場はどのように進んでいくのか興味深いところです。

洋書協会主催の洋書バーゲンコーナーは、規模にお

いてはほぼ昨年と同様のワゴン39台での展開でしたが、昨年までとはうって変わってメイン会場内にコーナーが設置され、震災復興支援チャリティコーナーやセミナー会場と隣接する事となり、会場内の案内用垂れ幕も大きく目立つようになったことで集客力も上がり、昨年、一昨年とは雰囲気の違いとところで、忙しく、にぎやかな洋書バーゲンフェア開催となりました。ただ売り上げに関しては、昨年同様業者等関係者が入場する会期前半の2日間では冊数・売り上げともにアップしていたのですが、一般読者も入場できる後半2日間では冊数・売り上げともにマイナスとなり、結果、会期中全体の売り上げはマイナス4.5%となりました。今年は出展社の内容に変更があったことにより、例年より多くの商品問い合わせがあったと思います。年々、前半2日と後半2日の販売額の差が広がっているような気がします。来年は、洋書協会の年に一度の恒例行事として、また、一般読者に対して洋書を直接手に取って購入していただく為に、今まで以上に多種多様な洋書がディスプレイできるよう出展社を募り、より賑やかな洋書バーゲンフェアにしたいと思います。

会期中、バーゲンセールのお手伝いを頂きました関係者の方々には、本当にご苦労様でした。(JPT A.O.記)

サマーパーティー

今年のサマーパーティーは7月13日(金)に3年ぶりに日本外国特派員協会(プレスクラブ)にて36社143名の参加で盛大に行われました。

今回も開宴前から大勢の方々がお越しになりウェルカムドリンクで賑やかな中、6時過ぎに開宴となりました。

司会の東亜ブック鶴氏による開会の挨拶で始まり、乾杯のご発声を丸善株式会社 代表取締役社長 松尾英介様にいただきましてパーティーの開宴となりました。

今回は特別ゲストとしてボランティアバンドの「Heart to Heart」のお二人(ジェームズ・ルードー氏、フィリップ・ジョンソン氏)にお越しいただきビートルズやカントリーミュージックを中心としたギター演奏を約1時間披露していただきパーティーをより一層盛り上げていただきました。

皆様最後まで会食・歓談を楽しんでまだまだお話が尽きないところでしたが中締めの時間となり、雄松堂書店 仲

氏の力強い一本締めでパーティーを閉会とさせていただきます。

次回も多数のご参加お待ちしております。

お知らせ

会員代表者変更(敬称略)

株式会社雄松堂書店

新代表者 雨宮 良宜(常務取締役)(6月12日付)

旧代表者 仲 光男

会社代表者

カクタス・コミュニケーションズ株式会社

代表取締役 湯浅 誠

住所変更

トムソン・ロイター・プロフェッショナル 株式会社Sweet & Maxwell

〒107-6119 東京都港区赤坂5-2-20 赤坂パークビル19階

TEL 03-4589-3260 FAX 03-4589-3242

Keiko の No.1 NY通信

ケンブリッジ大学出版局の日本オフィスからニューヨークオフィスに異動してから丸8か月。現在はレファレンス本や電子商品を販促する仕事に携わっていますが、同じ会社で扱う商品が同じと言っても市場規模も職場環境も当然日本とは異なります。ケンブリッジ本社とのやり取りも非常に多く、アメリカにいなが午前中はイギリス時間、午後はアメリカ時間で仕事をしている感覚を覚えるくらいです。(おそらく100%アメリカの出版社で仕事をするのとは異なる経験だと思います!)



私が所属するライブラリーチームはカナダを含めた北米の大学図書館を主なターゲットとして活動するチームです。営業3人、マーケティング2人で構成されており、営業は基本的には電子商品の営業に特化し、マーケティングはプリントとデジタル商品の両方の販促を担当しています。この間、私は主にマーケティングの仕事を携わりながら、アメリカの大学図書館の電子ブック収集の動向やプリント版書籍の動きを興味深く追ってきました。

この広いアメリカ、電子ブックが浸透しているといってもケンブリッジの電子ブックを購入していない大学はまだたくさんあります。アグリゲーター経由電子ブックを購入する大学も多いので、実際の浸透率は定かではありません。ただ、大学のサイズに関わらず確実に電子ブックに関する問い合わせは日々増えており、年間を通してコンスタントに電子ブックが売れる現状を考えますと、アメリカ大学図書館の収集方針が総じて電子中心に変わってきていることは明らかです。特にプリント版とデジタル版の同時出版を実現する出版社が増えるのに比例し、新刊については『電子優先』の方針の打ち出している大学が急速増えています。

電子化の流れがもたらした図書館の収集方針の変化について、よく『Just in Case vs. Just in Time』という表現を耳にします。プリント版のみの時代は蔵書の一部としてとりあえず書籍を購入し利用者に利用されることを期待していた。しかし、蓋を開けてみたら結局のところ利用されない書籍がたくさんあった。これに対し、電子の到来でPDAやDDA*などの購入モデルを通して利用者が実際に必要とするコンテンツの収集が可能となり、必要とされたときに必要な資料を収集することができるようになった、という訳です。先月参加したAAUP **のPDA

セッションでもJust in Timeの収集方針のメリットの話がありました。その話を受けて、利用が極めて少なくても学術的に重要で他に変えがたい資料の収集はどうするのかという質問がありましたが、図書館員の返事は「使われないのであればおそらく自分の図書館は買わない。ただ、どこかの図書館が必要とするはず」と。電子化により利用される資料を確実に収集できるようになったのは画期的な事だと思いますが、それがすべてではないはずと、そのやり取りを聞きながら図書館のあり方について考えさせられました。



『電子優先』はどこまで進んだのか、または今後進むのか。社内の会議でもその話題は常に出ます。The New York Times 週末版のBook Reviewを見ますとプリント版書籍と電子ブックのベストセラーが当然のごとく並んで掲載されており、リストアップされているタイトルに多くの重なりがあります。ただ、同じようなリストが大学図書館マーケットについて存在したとしたらどういうリストになるか。電子化が進んでいるといっても大学や分野によってそのスピードやニーズが異なる現状を目の当たりにしながら、最近では「プリントvs.デジタル」を2つの対照のものとして考えるのではなく、共通のコンテンツに対する異なるフォーマットとして見るべきだと感じています。コンテンツ購入方法に選択肢を設けること、また多様化したマーケットのニーズにどれだけ柔軟に対応できるかが今後出版社に課せられた最大の課題ではないかと考えています。

平野圭子@ニューヨーク

2012年7月 khirano@cambridge.org

追伸：ニューヨークにいらっしゃることがあれば是非ご連絡ください。

*PDA: Patron Driven Acquisition

**DDA: Demand Driven Acquisition

**AAUP : Association of American University Presses

※CUP NY勤務を始めた平野圭子さんに寄稿いただきました 会報委員会



アカデミア・ミュージック(株) 平岩 寧

グイドが始めた歌唱法はドレミではなくウト、レ、ミ、ファと歌っていましたが月日が経つにつれて ut=ウト は do=ドと変わっていったようです、何時どの様になっていったかは明らかではありません。

ut,	re,	mi,	fa,	sol,	la
ウト、	レ、	ミ、	ファ、	ソ、	ラ、
ド、	レ、	ミ、	ファ、	ソ、	ラ、
c,	d,	e,	f,	g,	a,

少し乱暴ですが上のようになります、これを見ますと「シ」が見当たりません六つの音だけでオクターブにはなっていません。中世の音階はこの六つの音を基礎にしているヘキサコルド= hexacordumと言われる音階です、ギリシャ音楽の音楽理論の基礎になっているテトラコルドと同様のものです [Hexa= ヘキサは六つで、コルドとは Cordos= 弦とギリシャ語です]、グイドはこれを基礎にして音楽理論を展開します。ド・レ・ミ・ファにお話しを戻しますがグイドが考えたと言いますかグイドが始めたところは六つの音でウト、レ、ミ、ファ、ソ、ラでしたが色々とありありまして、何時頃にドレミファソラシになったのかは、はっきりしていませんが十七世紀の後半のことだそうです。それでも、フランスでは音の表記には現在も「ド」を「C」ではなく「ut」を使っています、楽譜・カタログにもハ長調は… en ut majeur、ハ短調は… en ut mineur をつかっているようです、もちろん楽譜の表紙には ut majeur/ C-dur / C Major と三か国語で印刷されています。

音の言い回しについては色々とおあるようですがド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シのシの呼び方について日本では「Bファール」を「H=ハー」、「B♭」を「B=ベー」と言う人が多いようですが、この言い方はドイツと日本だけだそうです。

グイドはネウマ譜に線を引くことで音の高さの基準を確認するのに役立つことになり、もともと歌唱の指導が上手であることは世間で認められていましたがその聖歌合唱指導の評価は高くなり、時のローマ教皇ヨハネス十九世 (ca 1020-1035年) の耳にも入り、教皇に招聘されローマを訪れ典礼聖歌の歌唱の指導にあたりますがローマの水が合わなかったのか体調を崩してローマを離れてアレツォに戻り晩年はその近くの教会・修道院で過ごし亡くなりました

たが正確な最後の居所、没年などは不明のようです。

ネウマ譜に線が入られたことでそれまで長い間、音の高低を知るために苦労してきたのが楽譜の上で明確に示すことが出来るようになりました、さらにその線の数も二本になり四本になり、ある時は六本の場合もあったようですが、近代の五線譜になったのは十七世紀になってからです。ローマのカソリック教会では今でもグレゴリオ聖歌の楽譜は四線の楽譜が使われています。

記譜法が五線譜に定着するまで、「音高」を示すだけであったのが音の長さ「音価」を表現することが考えられます、「音高と音価」の両方を表現する記譜法はモーダル記譜法と呼ばれていますがさらに、作曲が活発になり創作活動が進むにつれ、これまでの記譜法に当てはまらなくなってしまうことが多くなり、新たに「定量記譜法」が提起されます、次には「黒色定量記譜法」が現れ十四世紀アルス・ノヴァの時代に使われます、さらに「白色定量記譜法」が十五世紀中ごろデュファイ等がポリフォニーで使うようになります。

この変化は楽譜に使われる材料の変化にもあったのではないのでしょうか、それまで多かった羊皮紙から紙が一般化し始めたからでしょう。

その他の楽譜としては「タブラチュア譜=奏法譜」があります、これは楽器毎にその特徴を持った演奏用の譜面で、実際の楽器の演奏にも使われています、楽譜に指定された弦に指をあて楽譜が指定する長さで指を動かせば曲が出来上がるというような楽譜です、バツハも時々使っていたようです。

ジャン・ジャック・ルソーは1740年8月22日にパリ科学アカデミーで『音楽のための新記号案』を発表します、『数字記譜法= notation chiffrée (仏)』と言われるもので音階を数字で表記し、基本にして音の長さは数字の下に下線或は点などを付けて五線譜に近い表現ができるように改良されましたが五線譜のような訳に行かず、限られた分野で使われる様になります。日本では五線譜の下側に併記されハーモニカ、大正琴の楽譜によく見られ、大衆音楽などに使われていました。明治時代は尋常小学校の教科書にも採用され、五線譜の下に数字譜が書かれているものもあります。 つづく

アイルランドの石(2)

エルゼビア・ジャパン(株) 楽原 七男

第四日目はコークから一度ダブリンに戻りそのままクララ(Clara)に向かい、合計4時間程列車に揺られての到着となりました。案の定バスはおろかタクシーも流していない小さな町で、クーリー蒸留所のあるキルベガンまで10km強の道をぶらりのんびりと歩きました。そこには地元の名士ロック(Locke)の創業した蒸留所があり、キルベガンの銘柄で売っていました。アイルランド唯一の独立系蒸留所クーリーは、ダンドークでカネメラを作る一方、この地でキルベガンを復活させました。昔の蒸留所の遺構もロック蒸留所博物館(Locke's Distillery Museum)としてよく保存され、入り口で案内パンフを借りて自力で巡回します。帰りがけに付設レストランでクラムチャウダーとキルベガン一杯頼み、最後に紅茶を頼むときに店員にタクシーの手配も頼みました。不思議そうにじろじろとこちらを見ていましたが、奥の方に走って行ったり蒸留所受付の方に行ったりしながら、ようやく電話番号が分かったようです。クララから歩いて来る客など皆無なのでしょう。

この日はクララからさらに鉄道で西に行きアスロン(Athlone)に投宿しました。

第五日目はアスロン近郊にある初期キリスト教遺跡のクロンマクノイズ(Clonmacnoise)を見物しました。当初シャノン川(River Shannon)のクルーズを利用しようとしたのですが、数日前までの大雨で増水し目的地の栈橋が水没して休止しているということで、前日にホテルで車を頼みました。ワゴン車が迎えに来て、観光客は他に一名のみ。結構な距離があった上、いろいろと案内をしてくれた割には格安でした。帰り道で運ちゃん、町で一番古いパブに寄るか聞いて来ました。願ってもないということで、立ち寄り

ました。オーストラリアから来た若者はギネスを、私はクーリーの名酒ターコネルを一杯飲んで帰路となりました。パブの名前は忘れましたが、往年のジャズ・トランペッター、デジー・ガレスピーのトランペットが壁に掛かっていて、その下にサインがありました。このパブを訪れたときに残していったものと聞きました。驚喜仰天。

この日の夕方、更に1時間程鉄道に乗って西に移動し、アイルランド共和国第四の都市ゴールウェイ(Galway)にて投宿しました。

第六日目はゴールウェイから出ている観光バスで一日遠足に出かけました。目的地はご当地の二大奇観、バレン高原(The Burren)とモハーの断崖(The Cliffs of Moher)です。バレン高原は一面石灰石の広大な台地、モハーの断崖は切り立った崖が幾重にも続く絶壁です。この日は霧がかかりモヤーとしていましたが、そのために一層海に吸い込まれそうな感じを演出していました。

この日の晩、ゴールウェイの目抜き通りはハロウィーンの奇妙な仮装をした若者でごった返していました。パブに入っても仮装大会のようなものでした。

第七日目はゴールウェイからダブリンへの移動日でしたが、途中タラモア(Tullamore)で下車し、タラモア・デュー(Tullamore Dew)蒸留所を訪ねました。ここは既に閉鎖して遺構見学ツアーとショップのみとなっていますが、日本でも時々見掛ける長方形の瓶はミドルトンのジェイムソン蒸留所で盛んに作られています。これまた素直で癖のないウイスキーです。

アイルランド最後の晩はダブリンの名パブと言われるデヴィー・バーンズ(Davy Byrnes)に行き、ゆったりとした雰囲気の中でグラスを傾けました。このパブはその昔ジェイムズ・ジョイスなど錚々たる名士のたまり場だったということです。音楽は一切なしで店内も静かそのもの。実に落ち着いた良い店でした。(終)



キルベガン蒸留所



バレン高原



Wolters Kluwer
Health

Lippincott
Williams & Wilkins

LWWOncology.com—

腫瘍学のプロフェッショナルに、癌に関する情報を
one-stopで提供する唯一のサイト



**LWWOncology.comでは、腫瘍学に関するあらゆる疑問に対する
的確な解答を、数々の著名な情報源から検索することができます。**

- 権威あるコンテンツに手軽にアクセス
- 専用に開発された腫瘍学サーチエンジンで必要な情報を素早く検索
- DeVita, Hellman, and Rosenberg's Cancer: Principles and Practice of Oncology, 9th editionへの年4回の最新アップデートが入手可能

さらに・・・

- 商品名3,200、ジェネリック名220におよぶ癌関連薬剤情報モノグラフを収載
- NCCN (National Comprehensive Cancer Network)のガイドラインをサイトでご提供
- 160超のNCI (National Cancer Institute)による患者教育用ハンドアウトを利用可能
- 追加を含む1,200枚の画像を収載
- Pub Medにリンクした参考文献表示

ウォルターズ・クルワー・ヘルス・ジャパン

〒113-0033 東京都文京区本郷3-23-14 TEL: 03-5689-5400 FAX: 03-5689-5402 e-mail: Toshiya.Murayama@wolterskluwer.com